

つまらぬ話と思うなれ —新入生の皆さん、おめでとう—

實　　智　天

慶應学園会員

文学部長　稻賀敬二

文学部に御入学の皆さん、おめでとう。
『手塚治虫とハムレット』皆さんが共通一次の試験を終えて、受験勉強の最後の仕上げに専念していたころ、手塚治虫氏がなくなってしまった。実は私と同じ年だったと知って、複雑な気持ちになった。
手塚氏が好んだことばは、ハムレットの「ホレー・シオ、この天地間には、哲学では夢にも考えられないことが、たくさんあるんだよ。」というせりふだったと、新聞に出ていた。

哲学科の諸君は、これを聞いて出鼻をくじかれた思いをするかもしれない。でも、そんな弱気では、長い一生はおろか、大学の在学期間を乗り切ることすらおぼつかない。「哲学では夢にも考えられない」世界は、実は歴史学でも、文学でも容易に歯がたたないものなのだと思えばいい。

既成の知恵や論理では把えがたいものが、この天地の間には、たくさんあるわけだ。皆さんが大学へ入学するまで、昼夜にわたって目の前にちらついていた偏差値という怪物などは、まことにちっぽけなものだということになる。

皆さんの中には、「私は偏差値ごときに振り回されたりはしなかった。そんなのはアホらしい」と言う人もある。まわりの人と同じようにふるまうのと、自分のペースを守ると、そのどちらが立派だなどと、評価をくだす気は私にはない。さんは受験時代を生き抜くために、自分に合った路線を選んだだけである。

受験時代という、一つの時代は終わった。皆さんのがこれから身を置く大学という場は、未知の世界である。先輩たちから聞いて知っているつもりでも、実際にそこへ身を置いてみると、かねて予想したり期待していたものとの違いがわかつて来る。高校時代とは必ずしも同じくはない新しい時代を、さんはこれから経験するわけである。

未知のものが目の前にあらわれるたびに、皆さ

んは、「鉄腕アトム」にならたり、「ジャンクル大帝」にならたりしながら、ハードルを一つ一つ越えて行かなくてはならないのである。

たとえば、どんな新しい事態があらわれるであろうか。比喩的に一つだけ例示してみよう。

『小咄が教えてくれるもの』江戸時代の不知足散人（小松屋百亜）の小咄集『笑談聞童子』（安永四年刊）にある話。

昔、「水に溺れぬ大秘伝を教えます」と看板を出した男がいた。入門希望が続々と来る。“明日、朝早く集合せよ”と男は指示した。

翌朝、集合した弟子どもを前にして、師匠は、“この大秘事は、ちょっとしたことだが、これさえ守れば、決して水に溺れる事はない”と前置きして、おもむろに“ヒザを崩して、スネを前に出しなさい”と命ずる。訓練の第一歩と、弟子たちは緊張した面持ち。

すらり並んだヒザの間を巡回しながら、師匠は手にした筆で、三里のあたり——分からぬ人がいるかもしれない、ヒザ小僧のちょっと下、芭蕉が旅に出る前、炎をすえた場所——そのあたりへ、師匠は、スイスイと筆で横線を引いて歩いた。

“何のオマジナイか”と、けげんな顔の弟子どもに、師匠はこう宣言する。“皆さん、ヒザ下の線を、よくおぼえておきなさい。そこより深い水の中へは、決して入ってはなりませんぞ！”

こういう時、“インチキ商法だ”と怒るタイプの人は、文学部の学問にはむいていないようである。文学部の学問に、実用的な秘伝伝授を期待するのが、もともと無理なのである。“水に溺れぬ”奇想天外な術を考えつく多様な人間のあり方に興味を持って、いろいろな角度からアプローチしてみるのが、文学部の学問である。

天と地の間には“夢にも考えられないことが、たくさんある。”それを知った時、人は豊かになる。

どうか皆さん、豊かな人になっていただきたい。